

コロナ禍における幼児の状況についての 保護者アンケート調査からみえるもの（2）

～時間経過による変化からの考察～

賀 門 康 博 奥 美 代

（令和4年3月）

郡山女子大学紀要 第58集別冊

（Vol.58）PP.207～216

郡山女子大学 郡山市開成3丁目25番2号

コロナ禍における幼児の状況についての 保護者アンケート調査からみえるもの(2) ～時間経過による変化からの考察～

What can be seen from the results of a questionnaire for parents of young children in the situation
where COVID-19 is expanding (2)

～ Consideration of changes in consciousness over time ~

賀 門 康 博* 奥 美 代*

Yasuhiro Kamon

Miyo Oku

Continuing from last year, we conducted a survey on parents' awareness of child-rearing, which is the current epidemic of COVID-19. The survey revealed that the prolonged epidemic of COVID-19 and various information have increased anxiety and changed its content. On the other hand, the anxiety about the growth of the child as seen last year has decreased, and it seems that the growth of the child in front of him is accepted obediently.

It is important to continue to support parents' anxieties that have become difficult to notice.

はじめに

2019年12月に中国内陸部の湖北省武漢で、原因となる病原体が特定されていない肺炎の患者が確認され、この原稿を執筆している段階で1年半が経つ。病原体はCOVID-19(新型コロナウイルス)と命名され、いくつも変異しながら今も全世界で猛威を奮っている。それにより長期化した生活の制限、相次ぐ緊急事態宣言の発出もあり一部では“気の緩み”等も指摘されている。

保育現場においても昨年同様に行事等の活動制限をせざるを得ない状況は続いているが、各園ではこの様な制限された中でも子ども達の生活経験や学習機会を確保するために、実施方法を模索しながら保育を継続している。保育を行うにあたって重要なのは子ども達の状況を把握することであり、そのためにも家庭における子育ての状況を理解しておくことはその基本的な部分で大切である。

昨年度、そうした目的の下に調査研究を行った。時期的に最初の緊急事態宣言が発出され、1ヶ月以上にわたる休校措置となった後の調査であった。その考察を通じて「教育としてもか

なり重要である4月から5月という期間に緊急事態宣言が出され、私らが考えていた以上に子ども達の外遊びが抑制されていた様子や、園での活動が喪失したことでの影響がある様に見られた様子も見えてきた様に思える」としつつ同時に「休校期間明けの学校においてケガが増えているという情報もメディアの中で散見される。これは今回の調査においても子ども達の活発さが減った割合が多く見られたこととも関連がある様に考えられる」とも結論づけた¹⁾。

今回は前回同様にアンケートをとり昨年からの変化を考察し保育のあり方について考察を行っていく。本論は非常時の保育について考えるための基礎的研究であり、継続研究の2年目と位置づけるものである。

研究方法

調査対象園の保護者に対して質問紙調査(無記名自記式)を行うものとする。調査結果を分析する。現状を把握するため、昨年同様に加藤(2012(未発表))²⁾が震災後の2011年7月に今回の対象園を対象として行ったものを基にしたアンケートをとり、その結果と比較をすることで、より立体的に状況の検証と考察を行うこととする。調査項目は以下の通りである。

- (1) 震災後との共通項目： ①外遊びの時間の変化 ②テレビ等の視聴時間等
③塾(習い事)の時間について ④子どもの育ちについて(〴〵聞き分け、について等)
- (2) コロナ禍における独自項目(前回(令和2年度調査)と同じ)：
⑤スマートフォン・タブレットの利用時間等 ⑥休日の過ごし方
- (3) 震災時と共通であるが、内容が少し違う項目(前回(令和2年調査)と同じ)：
⑦現在の状況に不安を感じているか ⑧何に不安を感じているか
- 今回は上記(1)(3)に絞り比較し、概要をみて考察を行っていくこととする。

対象学年

対象園における全学年の家庭を対象とする。

調査について

今回の調査対象は福島県の中中部(いわゆる県中地域)郡山市にあるK幼稚園である。学校法人の幼稚園であり、定員は150名、在園児はプレスクールである2歳児、そして満3歳から年長児の園児併せて160名程度の在園児がいる中規模園である。

アンケート時期：令和3年7月8日～16日

アンケート方法：アンケート用紙を保護者に配付し、後日回収した。

アンケート対象学年及び年齢：全学年(①2～満3歳児 ②年少(3歳児) ③年中(4歳児) ④年長(5歳児))

コロナ禍における幼児の状況についての保護者アンケート調査からみえるもの(2)

アンケートの回収数(n) = 155 (学年別回収数(n): 2～満3歳児…16, 年少(3歳児) …43, 年中(4歳児) …50, 年長(5歳児) 46)

なお、令和2年度における前回の調査対象及び回答数は以下の通りである¹⁾。

アンケート対象学年及び年齢: 今回と同様。

アンケートの回収数(n) = 154 (学年別回収数(n): 2～満3歳児…15, 年少(3歳児) …50, 年中(4歳児) …45, 年長(5歳児) 44)

アンケートの回収数(n) = 106 (学年別回収数(n): 年少(満3歳児・3歳児) …33, 年中(4歳児) …38, 年長(5歳児) …35)

なおアンケート内容について、今回も「外遊びが多くなった、少なくなった」等の質問における比較年度をコロナ禍以前のおおよそ令和元年度としている。よって、昨年の調査結果同様に保護者の回答判断基準は令和元年度と比べてどうか、となっている事を付記しておく。

集計及び統計については Microsoft Excel 2010 を使用した。ソフトの内部処理の関係で割合について合計値が100%にならない事もある。

倫理的配慮

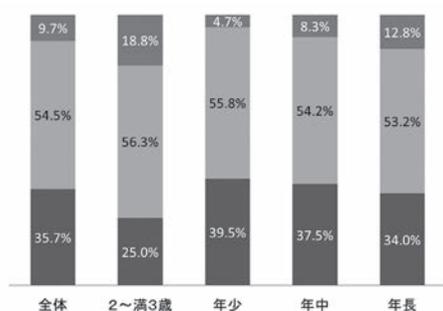
本研究については、郡山女子大学ヒトを対象とする研究に関する倫理委員会による承認を受けている。(課題番号 2020-103) 調査データは個人が特定できないよう処理を行うため、個人情報が増えることは全くないよう配慮することも合わせて保護者及び保育者に説明をした。

調査結果

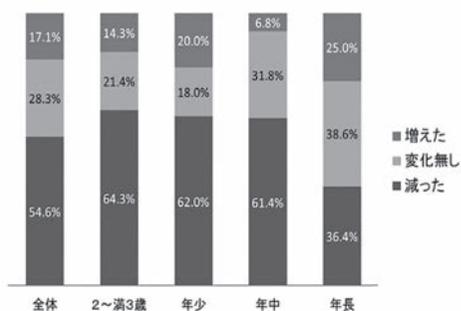
1. 外遊びの時間の変化

まず全体で見ても令和元年の状況に対し減ったと回答した割合が減少((令和2年) 54.6% → (令和3年) 35.7%) し、変わらないと答えた割合が大幅に増えている((令和2年) 28.3% → (令和3年) 54.5%) ことが見て取れる。前回の時は盛んにステイホームという名目で家の中で過ごすと言うことが生活において強調されていたが、現在は三密にならないといった点を考慮しながら外に出かけながら過ごす様になってきた姿が見えてくる。これは年少→年中、年中→年長といった同じ学年における変化でも同様の傾向が見られることから、子どもの成長による活発な活動の増加によるものというより、保護者の意識の変化によるものと考えられる。

コロナ禍における幼児の状況についての保護者アンケート調査からみえるもの(2)



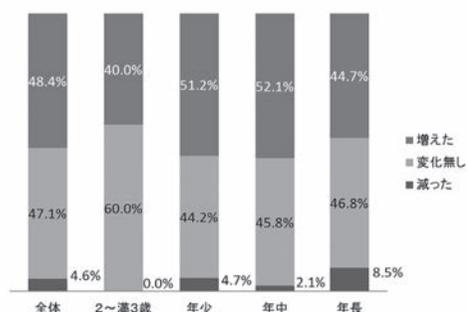
【グラフ1】外遊び(今回(令和3年調査))



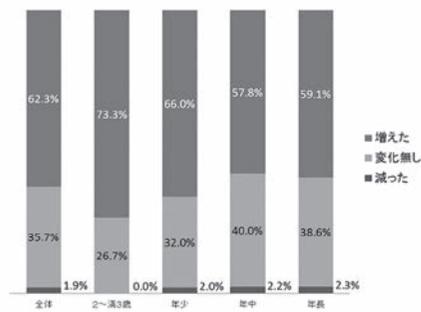
【グラフ2】外遊び(前回(令和2年調査))

2. テレビ等の視聴時間等(グラフ3, 4)

先ほどの外遊びの結果に反比例する形で、テレビの視聴時間は全体的に減少している。特に「減った」と回答した割合は、全体で2.7%増加(((令和2)1.9%→(令和3)4.6%)し、学年単位で見ると特に今年の年長組では6.5%増((令和2)2.3%→(令和3)8.5%)となっており、家庭生活における質の変化がここでも見ることが出来る。



【グラフ3】テレビ等の視聴(今回(令和3年調査))

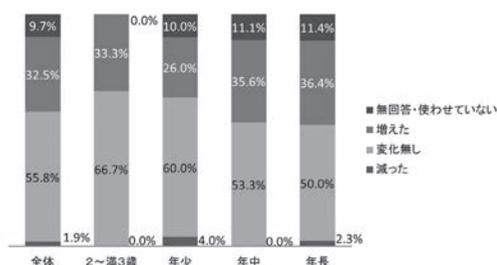


【グラフ4】テレビ等の視聴(前回(令和2年調査))

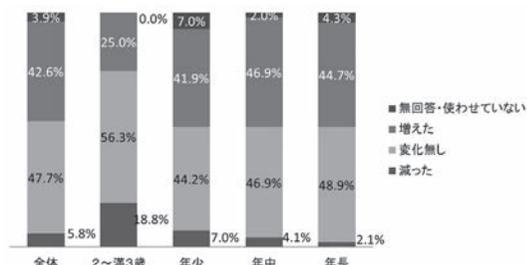
3. スマートフォン等の利用変化(グラフ5, 6)

一方でスマートフォン等のIT機器の利用については、全体で増加傾向(「増えた」)((令和2)32.5%→(令和3)42.6%)を見ることが出来る。また、回答数が同程度の年少～年長においては回答三項(減った・変化無し・増えた)の割合に同じ様な傾向を示している。ここからは様々な推測が出来るが、この1年の時間の中でスマートフォンを使って過ごすということが子ども達の生活の中により浸透したのではないかと考えられる。スマートフォンにおけるアプリなどもコロナ禍においてより子ども向けのものが増えてきていることも推測される。

コロナ禍における幼児の状況についての保護者アンケート調査からみえるもの(2)

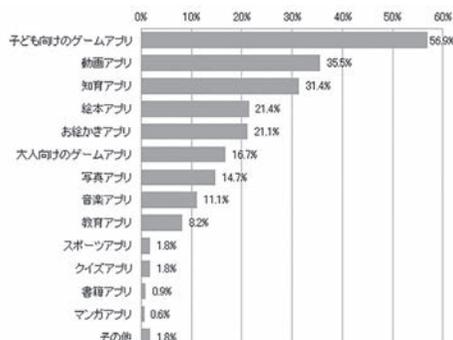


【グラフ5】スマートフォン等の利用変化
(今回(令和3年調査))



【グラフ6】スマートフォン等の利用変化
(前回(令和2年調査))

本調査ではないが、グラフ7はMMD研究所が子供と一緒に遊んでいるスマートフォンアプリのジャンルについて2013年に調査した結果を示したものである³⁾。スマートフォンを子どもに利用させている親が増加していく中で、子ども向けのゲームや動画アプリをどう使い、どう付き合っていくかについて、保育現場としても十分に留意し、保護者に向けての情報発信などをする必要性を感じる。

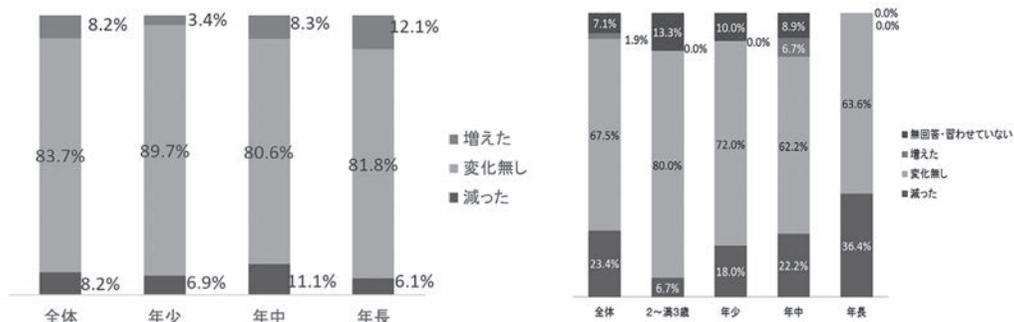


【グラフ7】子供と一緒に遊んでいるスマートフォンアプリのジャンル (N = 341)

4. 塾(習い事)の時間について(グラフ8,9)

塾(習い事)に関しては、昨年度は学年が上がるに従って若干の増加傾向(3.4%～12.1%)が見られたが、今回の調査においてはむしろ減った割合が増加していることが分かる。特に今年の年長組においては36.4%が以前より減ったと回答しており、コロナ禍という状況と年齢も大きくなったことから習い事をさせたものの(昨年の年中組の段階では8.3%増加)、続かなかったとも考えられる。また、園が比較的通常通りに動き出したことで子どもの学習機会の損失への心配が少なくなったと感じているとも考えられるが、これについては後で出てくる質問項目(⑦現在の状況に不安を感じているか、⑧何に不安を感じているか)の分析と合わせて考察していくこととする。

コロナ禍における幼児の状況についての保護者アンケート調査からみえるもの(2)

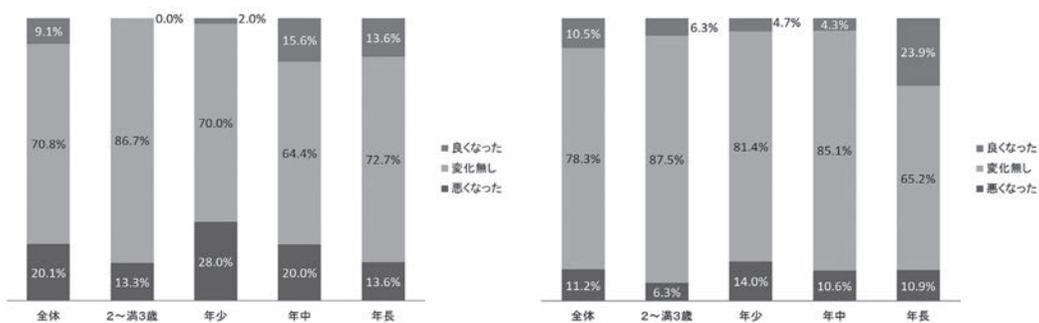


【グラフ8】家での習い事の変化(今回(令和3年調査)) 【グラフ9】家での習い事の変化(前回(令和2年調査))

5. 子どもの育ちについて

①「聞き分け、(我慢づよさ)について」(グラフ10, 11)

聞き分けについては、全体的な傾向としては令和3年度も年長になり聞き分けも良くなってきたと見ることが出来るが、昨年度は年中、年長とも良くなったとの回答が同程度(13～15%)見られたが、今年度については年中組の昨年度比-11.3%、年少から年中組への向上率(良くなったの割合の変化)が昨年度は+2.3%であり小さいものとなった。ただし、悪くなったとの回答も-17.4%と大きく減少している。このデータからは、昨年度一旦悪くなった聞き分けが、現状への適応による安定によって戻ってきたとも考えられる。これには多くの要因が絡んでいるので、より詳細な検討が必要であると付け加えておく。



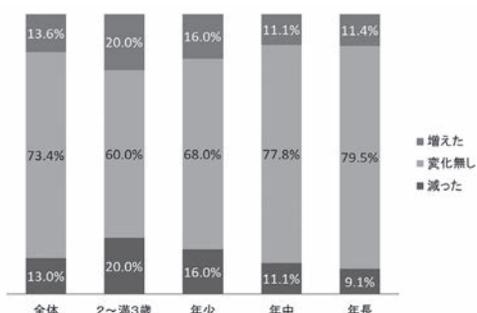
【グラフ10】聞き分け(今回(令和3年調査))

【グラフ11】聞き分け(前回(令和2年調査))

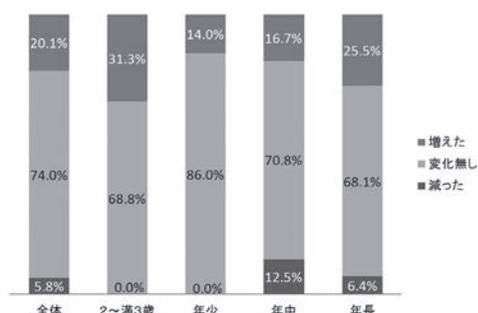
②「活発さについて」(グラフ12, 13)

活発さについては全体的に向上した様子が見られる。増えた割合の増加と共に減ったと答えた割合についても、(令和2)年中→(令和3)年長の園児比で-6.5%、(令和2)年少→(令和3)年中の園児比で-3.5%と共に減少しており、先ほどの聞き分け同様に現状への適応からの改善(安定)が伺える。

コロナ禍における幼児の状況についての保護者アンケート調査からみえるもの(2)



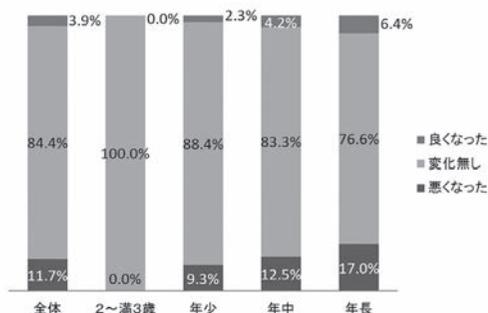
【グラフ12】活発さ(今回(令和3年調査))



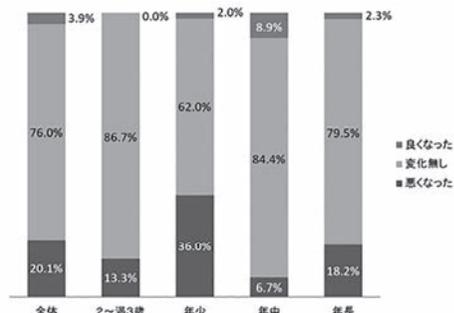
【グラフ13】活発さ(前回(令和2年調査))

③「情緒の安定について」(グラフ14, 15)

昨年については“良くなった”“悪くなった”の割合について学年毎にバラバラ(デコボコ)であったが、今年の結果を見ると学年を追うに従って良くなった、悪くなった共におよそ3~4%程度ずつ増加している。これの解釈としてはコロナによる状況変化からの影響が強かった昨年の状況から、発達に応じた成長による情緒の変化や先の活発さの変化と合わせて心身の活動量の増大にコロナ禍による状況がマッチせず、情緒の変化が安定に繋がっていない様子が伺える。特にそれは(令和2)年中→(令和3)年長児の良くなったとの回答割合が-2.5%、悪くなったとの回答割合が+10.3%となっている所から伺い知ることが出来る。



【グラフ14】情緒の安定(今回(令和2年調査))



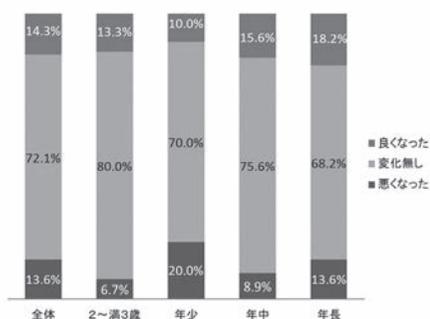
【グラフ15】情緒の安定(前回(令和3年調査))

④「生活習慣の自立について」(グラフ16, 17)

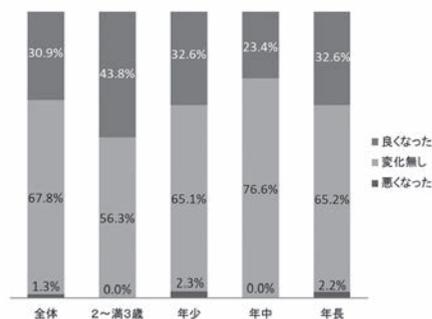
生活習慣の自立に関しては、全学年を通じて良くなったと答えた各学年の統計結果も倍近く増えており、全体の割合の比較でも2.1倍となっている。これは同じ子の成長(進級)による増加だけではなく新入園児の割合が多い2~満3歳クラスや年少組においても同様の傾向となっている。これについては、園での生活習慣への指導以上に、遠出などが出来ない家庭生活において、子どもを普段の生活の中で見る機会が増え、排泄や衣服の着脱といったお子さんの生活

コロナ禍における幼児の状況についての保護者アンケート調査からみえるもの(2)

習慣に目が届くようになり、適切なタイミングや関わり方を取ることが出来る様になったのではないかと考えることが出来る。



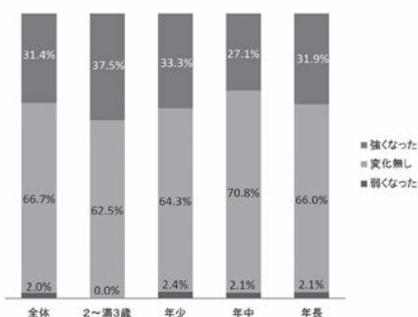
【グラフ 16】生活習慣の自立(今回(令和3年調査))



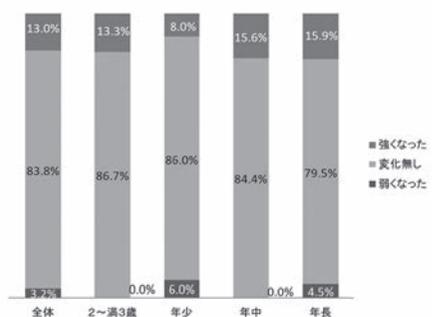
【グラフ 17】生活習慣の自立(前回(令和2年調査))

⑤「思いやりの気持ち(他の人への関心)について」(グラフ 18, 19)

先の生活習慣の自立と同様に全体的にポジティブな回答が増加している。全体の回答においては2.4倍となっており、全学年で強くなったとの回答が増加している。これも様々な要因が考えられるが、家や近隣で過ごす事が多くなったことで、家庭外でのイベント的な楽しさに頼りすぎず、親子で人と人との関係性を楽しむ事が出来ており、それを認める保護者の見方も醸成されてきているのではないかと推測することが出来る。



【グラフ 18】思いやりの気持ち(今回(令和3年調査))



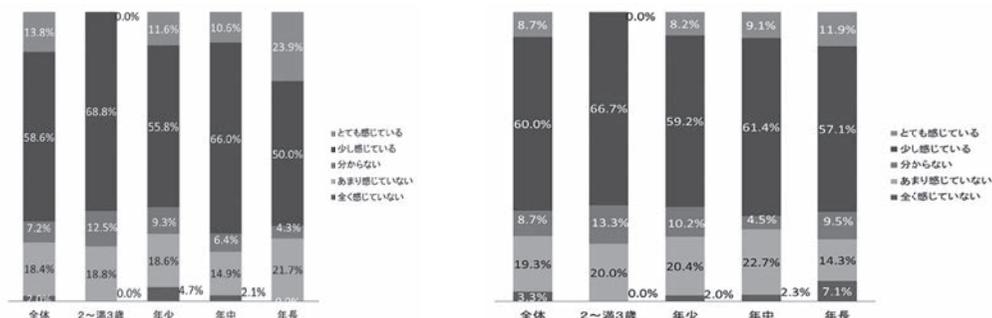
【グラフ 19】思いやりの気持ち(前回(令和2年調査))

6-1. 現在の状況に不安を感じているか(グラフ 20, 21)

「少し感じている」と割合が多いのは同様であるが、ネガティブな回答の合計(「少し感じている」+「とても感じている」)について全体の回答を比較すると、昨年度が68.7%であったのに対し、今年度は72.4%となっており+3.7%上昇している。同じ子どもの比較では(令和2)年中→(令和3)年長の学年ではネガティブな回答の合計が+3.4%、(令和2)年少→(令和3)

コロナ禍における幼児の状況についての保護者アンケート調査からみえるもの(2)

年中の学年では+2.9%と3%前後割合が増えている。最も変化した回答についてはそれぞれであるが、全体的に不安方向に推移している事を読み取ることが出来る結果となっている。

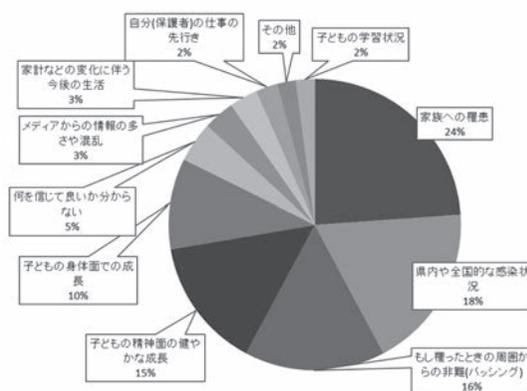


【グラフ20】不安を感じているか(今回(令和3年調査))

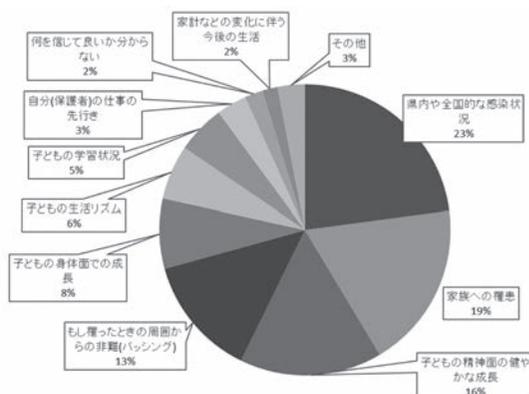
【グラフ21】不安を感じているか(前回(令和2年調査))

6-2. 不安の内訳(グラフ 22, 23)

前回の研究では紙面の都合で割愛した不安の内容を今回は比較してみる。第1位が昨年度は「県内や全体的な感染状況(23%)」から「家族への罹患(24%：昨年2位)」になり、今年は第3位に「もし罹ったときの周囲からの避難(パッシング)(16%：昨年4位)」となっていることから、罹患すること自体が既に間近であり、自分や自分の家族の問題として見ている様子が伺える。また、今年6位「何を信じて良いか分からない(5%：昨年9位)」や今年同率7位「メディアからの情報の多さや混乱(3%：昨年はその他)」今年同率7位「家計などの変化に伴う今後の生活(3%：昨年はその他)」も全体の中での順位を上げており、混乱と実生活への影響の増加に伴い、不安の要素についての変化も感じられる結果となっている。なお、昨年の分析において懸念されていた「子どもの学習状況」に関しては、11位(2%：昨年6位)と割合的には若干ながら改善され、不安は弱くなっているものと考えられる。



【グラフ 22】不安の内訳(今回(令和3年調査))



【グラフ 22】不安の内訳(今回(令和3年調査))

おわりに

総じて概観すると、昨年よりも不安要素は強くなりつつも、それに順応せざるを得ない状況から、昨年のように子どものこれからの学習面や心身の育ちに対しての懸念は弱まり、むしろ目の前の子どもの成長を見て、受け止められる心情になりつつあると見る事が出来る。保育現場としてはそうした変化をポジティブに受け止めつつも、保護者の内面にある生活全般における不安を無視することなく寄り添っていくことが、保護者の精神面での安定につながり、ひいては子ども達の安心・安定に繋がると考える。

今回は各データを比較して考察するに留まったが、今後のこの調査内容を更に精査する中で、保護者の心理と子どもの見方(受けとめ方)といった繋がりにも言及出来ればと考える。そうした分析がコロナに限らず保護者の子育てに対する不安の在処を探る一助になると考える。今後も調査分析を継続しつつ実践知を集め、新型コロナウイルスを含めた今後の“不安定な社会”に対抗する幼児教育のあり方を考えていくことが求められるとし、本研究の結びとする。

【引用・参考文献等】

- 1) 賀門康博、奥美代, コロナ禍における幼児の状況についての保護者アンケート調査から見えるもの～東日本大震災時との比較による考察～, 郡山女子大学紀要第57集 (Vol.57), pp.157-168, 2021
- 2) 加藤孝士, 保護者・保育者の意識, 日本保育学会研究集会(福島における小集会において簡易的な報告を実施), 2012
- 3) MMD 研究所, 子供と一緒に遊んでいるスマートフォンアプリのジャンル, https://mmdlabo.jp/investigation/detail_1263.html, 2014